

著述内容は、風評をあおらないよう事実関係を正確にすることに意が尽くされているようです。国内の行政の対応に不手際が指摘された原因として、欧州での被害拡大の状況に学びマニュアルを準備していなかったことを、昨年春の口蹄疫と対比しつつ指摘しています。また、今後の対応として、牛の素性を明らかにする「パスポート作り」の必要性が述べられ、さらに長期的には、粗飼料多給型畜産と、地域の伝統的食材を重視した食文化形成の重要性が強調されています。

去る11月15日、明治大学で開催された食の安全性に関するシンポジウムには著者も講師の1人として登場し、会場の消費者や外食産業関係者からの「国産牛は不安」と言った質問に対しては、「現在流通している牛肉は安全性が確保されており不安はない。私自身、牛肉は大好きで消費量は全然落ちていない」と強く発言されていたのが印象的でした。

(りえぞん No.8, 2001/11/22)

「試行錯誤し考える農民」への期待

大泉一貫「ニッポンのコメ」

(2001年7月, 朝日選書)

著者は宮城県出身、東北大学農学部助教授などを経て2001年から県立宮城大学大学院教授。農業経営者を対象とした「一貫塾」を主宰するなど、現場主義の実践家としてもよく知られているところです。

さて、本書は、米に対する日本人(著者)の思いから書き起こされています。それは、主食はずっと昔から米であったというイメージがあり、田植え時期や実りの秋の田んぼの情景は日本の原風景のように懐かしく思われる一方で、コメの生産や流通の仕組みは「社会の常識では理解しがたい複雑な仕組みとなってしまった」との嘆きです。

本書では、旧食糧法から新食糧法へ移行す

る中でその「複雑な仕組み」がどのように変遷してきたかについて詳細に分析されています。そして現在、食糧法の下、著者の言う「食糧法遺制」に寄りかかろうとする人々の考え方と、「消費社会の商品になり果てたコメ」という日本社会の二つの考え方のギャップが「再生産」されていると指摘しています。また、現地調査事例に即し、「現在の生産調整の行政コストはあまりに高すぎる」としています。

しかしながら著者自身も認めているように、これらの隘路から脱却する方策については抽象的なものしか示されていません。当面、「市場経済化による業界の再編と、食の安全性や食材への関心の強化という倫理観を持った主体がイニシアティブを確立すべき」とし、また、その主体については、「官僚と業界が一体となって推進する国家統制型」ではなく、「市場に向き合い、お客の要望に真摯に応えようとする仕組み作りが必要」としています(この思いを込め、あえて標題はカタカナにしたとのこと)

その一方で、戦後日本の「無価値社会、信念のない進歩主義が日本の農業を壊滅的にした」ことを批判し、「新たな農業や農村社会の構築には、高度経済成長を支えた価値観とは異なった価値観が必要」としていますが、これについても、「これに気づいた人々の間で作る関係のなかで、新たな規範と倫理を育てていくしかないだろう」との表現に留まっています。

さらに、担い手に関しては、食糧法によるコメ市場経済化によって「試行錯誤し、考える経営者」が登場し、構造改革の担い手として期待され始めている点に注目しています。著者は、これら経営について「いきなりの自立は難しくても、試行錯誤しつつ、その結果を自らのものとして背負うことはできるはず」とします。そして、消費者と直接交流しブランドを確立している「試行錯誤する経営者」の実例を紹介するとともに、「我が国のコメシステムは、彼らの試行錯誤を支援できるようなものにそろそろ作り替える必要がある」というのが、本書の結論となっています。

(りえぞん No.9, 2001/12/6)